カリキュラム形成研修会
Ⅱ．長期的な実践の省察から
（全５回：ハイブリッド実施）

何を大切に実践を営み，どのような子どもの未来を思い描いていたのかを振り返り，対話からカリキュラムを形作ります。

研修の目的

1｜どのような子どもの未来を思い描きながら保育実践を営んできたのかについて、長期的なスパンで省察し、対話的方法により協働的に教育課程を形成していくプロセスを探索的に学ぶ。

2｜保育実践の「痕跡」、または身体性を潜らせた主体としての言葉で語り合い、学び合う園内研修のデザインを検討する。

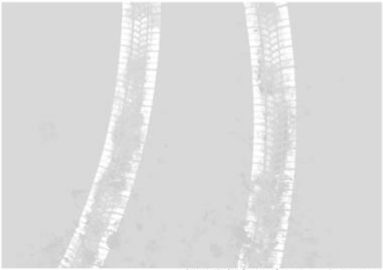
参加者

幼児教育実践者・研究者・大学院生　　及び　本園教諭　７名

■研修内容　（第３回：４歳期を中心に実施）

15:00　参加者自己紹介
15:10　カリキュラム・マネジメント及び生成カリキュラムの考え方について
15:20　４歳　Ⅳ期　省察と対話
16:20　５歳　Ⅲ期について
16:30　３歳　Ⅳ期について
16:40　振り返り

実践の痕跡としての事例が結果的につながり，
履歴カリキュラムを生成する



松田登紀(2023)ともに生きていくいとなみとしての教育

奈良女子大学附属幼稚園

わたしたち実践者の
専門性を構成する基本的要素(2023)

「実践の省察」

出来事が子どもとわたしたち、そしてわたしたちを取り巻く
他者や世界にとってどのような意味をもったのか、
どのような意味が生成されたのか、
保育の文脈の中で、わからなさも含めて共存し、
短期的に、長期的に理解しようとすること

対話内容　抜粋

実践では対話を大切にするけれど教育実習では「指導」になるのは何故か

・対話での問い直しが園内で進んできている中、
「研究保育ってなんのため？」「教育実習ってなんのため？」
→打ちのめされて終わった経験にしてよいのか？
できたら保育の楽しさ、一人でも多く幼児教育に携わる人を増やしてほしいと思う。

・学生から私たち教員が問い直され、共に幼児教育を考えていける仲間となる可能性を考えていきたい。

記録は誰のために？何のために？

・記録は読み返すのか？経験として積み重なって良くなるのか？
→何をもって「良くなる」とするのか。
その時の自分の省察の記録なので見返しているかどうかは人による。
・D.D.(Daily Dialogue)を実施するようになって、週の記録の表現が変わった。誰かに見せるためのものでなくなった。
・日本の教育では、課題を共有する文化だった。ネガティブなことを克服する面から子どもが生み出しているものに目を向けてもいいのではないか。それを可能にする記録と共有の仕方とは。

子どもとは「人と人」の対話の姿勢が培えてきたけれど、相手が保護者になると「教師と保護者」になるのは何故か？

→子どもと教師は、共通して関わる対象がある。
保護者と教師は、第３項が「子ども」になり、子どもが媒介しても対話が難しくなる。
子どものビジョンで擦り合わせるのは難しいので、具体的な姿で共有していくほうが契機になるのではないか。

今、ここでの育ちを踏みとどませるということ

・できないことができるようになることも確かにある。
でも、その子どもの最大限の可能性を、今しかできない発見を、「楽しかった」という無難な感想を身につけさせるのではなく、その子どもが自分の経験をくぐらせた言葉で語れるようにしていきたい。

・幼児はどうしても、「早く」「大きく」を求められる存在。
そこを、今、ここで何が育っているのか、
彼・彼女にしかできない対象との出会いを丁寧に大切にしたい。